

音象徴語をめぐる言語普遍性と言語個別性

飯田香織

1. はじめに

言語を構成する音韻と意味との関係は、言語学的には恣意的であると考えられてきた (de Saussure, 1916/1983)。しかし、言語の中にはその音韻が特定の意味と結びつくという関係が見られる場合もあり、音そのものがある意味やイメージを喚起する現象は音象徴と呼ばれ、「同一の母語話者もしくは異なる言語話者間で特定の音韻が同じイメージを引き起こす傾向があるかどうか」という「音象徴の普遍性」について議論されてきた。

英語母語話者もしくは異なる言語話者を対象に行われた音象徴の普遍性についての研究は、Sapir (1929) を代表とした無意味語を刺激語とした研究¹ (英語母語話者 Sapir, 1929; Newman, 1933 日本語・英語母語話者 Miron, 1961 日本語・韓国語・英語・タミル語母語話者 Taylor & Taylor, 1962 英語・タイ語・中国語母語話者 Huang, Pratoomraj & Johnson, 1969 など) と 英語母語話者を対象に行われた有意味語を刺激語とした研究² (日本語・英語 Tsuru & Frei, 1933 英語・中国語・チェコ語・ヒンズー語: Brown, Black & Hollowitz, 1955 英語・クロアチア語・日本語 Malzman, Morriset & Brooks, 1956 英語・ヘブライ語・中国語・日本語 Brackbill & Little, 1957 英語・中国語・ヒンズー語 Brown & Nutall, 1959 ナバホ語・中国語・ヒンズー語 Atzet, 1965 など) という、大きく分けて二つの流れがある。これらの先行研究の中で、特に無意味語を刺激語とした研究 (Sapir, 1929 など) は、日本語の音象徴語と共通の性質を持つ現象として捉えられた (芋阪, 1999; 田守, 2002)。そこで、これまでの先行研究では、音象徴語の言語普遍性と言語個別性について検討するために、主に3つの観点から研究が行われてきた。それらは、①心理学的な観点 (芋阪, 1999 など)、

¹ たとえば、Sapir (1929)は、母音だけが異なる無意味語のペア(例 “mal- mil”)を呈示し、それぞれの中ではどちらのほうが視覚的に大きいまたは小さい対象を意味しているかを答えさせる実験を行った。

² たとえば、Tsuru & Frei (1933) は、英語母語話者を対象に英語と日本語の有意味の刺激語を一対ずつ提示し(例 “old-wakai”, “big-chiisai”), 意味が同じかどうかを被験者に答えさせる実験を行った。

②神経学的な観点 (Arata, Imai, Okuda, Okada, & Matsuda, 2010 など), ③言語学的な観点 (Iwasaki, Vinson & Vigliocco, 2007 など)である。よって, 本稿は, 古くから議論され続けている音象徴語に関する一連の研究を概観し, 日本語教育における音象徴語の位置づけについて捉え直しを試みる。

1. 音象徴を表す語群に関する定義

一般的に, 擬音語は外界の音声を模倣した語と考えられ, 擬態語は物事の様子や状態を表した語とされている (浅野, 1978; 天沼, 1974; 瀬戸口, 1985; 飛田・浅田, 2002 など)。擬音語・擬態語の総称としては, オノマトペ³という語が用いられることが多い。しかし, 矢口 (2011) は, 擬音語は聴覚情報を直接ことばによって表現された語であることから, 他の感覚に対し二つ以上の感性体験を共有する共感的な様相 (Williams, 1976) を示す擬態語とは異なるため, それぞれ別々に使用すべきだと指摘した (矢口, 2011)。同様に, 芋阪 (1999) も, 擬音語が聴覚情報をことばで表現したものであり, 擬態語は事物の状態やありさまを描写した視覚的・触覚的感性を表すことばであることから, 擬音語と擬態語の間にある機能的な違いは心理学的に明白なので, 類別して扱うべきであると指摘した。つまり, 日本語の音象徴語を感性表現として捉え, 心理学的な立場から音象徴語の研究を行う際には, 擬音語と擬態語という呼び方に分けて捉える必要があるといえよう。しかし, 言語学的に日本語の音象徴語の普遍性について検討する際にはどうであろうか。Akita (2009) は, 音象徴語の語彙的意味を「一般語からの逸脱の程度⁴」として捉え, 擬音語の方が擬態語よりも一般語彙から逸脱した語であると位置づけた。しかし, 音象徴語の中には, 擬音語か擬態語かをはっきり区分できないような, 意味を複数持つ多義音象徴語も多く存在している (玉岡・木山・宮岡, 2011; 宮地, 1978)。また, 「擬音語」と「擬態語」のどちらの語彙群かという位置づけによってその意味を判断することは, 母語話者でもその厳密な画定をすることが難しいような境界的な語彙群も存在している (秋元, 2007; 野間, 1998)。よって, 言語学的な観点から音象徴語を検討する際には, 音象徴という言語学的な定義特徴に基づく「音象

³オノマトペという語の由来である *onomatopoeia* が主に動物の鳴き声を模倣した語を指すのに対し, 日本語の「オノマトペ」は必ずしも音を伴わない様態や心情を表す語も含まれている。

⁴「一般語からの逸脱の程度」は, 擬音語は異なる複数の言語間でも類似の象徴性が見られる (たとえば, 咳の音 (Bartens, 2000), 犬の鳴き声 (野間, 2001)) ことから, 語の音と意味との有契性が擬態語よりも強い (擬音語 > 擬態語 > 一般語彙) というような先行研究の指摘を根拠に挙げている (Akita, 2009)。

徴語」を用いるのが適切であると考えられる（飯田・玉岡・初, 2012 ; 玉村, 1989; 羽佐田, 2005）。

2. 共感覚表現から共感覚的比喩表現, そして多義性へ

2.1 共感覚表現としての音象徴語(擬音語・擬態語)

心理学(認知心理学)の領域では, 単一の音節や音象徴語を刺激語として, Semantic differential 法(SD 法)(Osgood, Suci, & Tannenbaum, 1957) や連想法などを用いて, 日本語母語話者もしくは非日本語母語話者に主観的評価をさせる研究が行われてきた(雨宮・水谷, 2006; 芋阪, 1999; 須部・梅本, 2004; 築島, 1941a, 1941b; 村上, 1980; 森本, 1979)。村上(1980)は「音象徴の現象が日本語に見られるとすれば, 最も可能性の高いものとして擬音語・擬態語が考えられる」という考えに基づき, 日本語母語話者を対象に, 音象徴語と聴覚に関する印象評定の関連について検討を行った。日本語母語話者の間では, 擬音語の持つ意味成分と音韻成分との間に高い相関が見出されたことから, 擬音語における直接的な聴覚表現が認められたと結論づけた(村上, 1980)。さらに, 芋阪(1999)は, 音象徴語は時に2つ以上の感性体験が共有される(共感覚)(Williams, 1976) 場合が考えられることから, 日本語母語話者に音象徴語から連想される感覚(たとえば, ピリピリ=触覚など)を自由連想法で答えさせた。すると, 聴覚による擬音語と視覚および触覚による擬態語がそれぞれ3割ずつ占めていた。このことから, 日本語母語話者の間には, 音象徴語が表す意味と五感との間に強い関連があることが示唆された(芋阪, 1999)。このように, 日本語の音象徴研究は, 擬音語・擬態語が感覚尺度としてどれ程の妥当性があるかどうかについて検討が行われてきたといえる。また, 「感性体験としての音象徴語が共感覚として観察されるか否か」という研究(芋阪, 1999)は, 「音象徴語の意味が派生していくのはどのような要因か」という意味的側面からの研究と関連していると考えられる。よって, 音象徴語の意味表現の派生について, その性質を比喩表現と捉え検討されてきた研究を次節で述べる。

2.2 音象徴語の共感覚的比喩表現とその多義性

呂(2004)は, 音象徴語の表現形式は, 日常経験から高度に抽出されたスキーマ(Rumelhart & Ortony, 1977)が, 具体的な感覚や様態を示したものであると述べた。たとえば, 「ころころ転がる」という音象徴語のスキーマは, 「前提条件として小さくて丸いものが存

在し、それが転がり始める段階があり、転がる過程で地面とその球体が接触しながら音を出して連続的に回転し、後半部分で減速し、最終的にどこかで停止する」という一連の様子について、それを観察している参加者が形成したイメージの総体(球体の転がる速さ、雰囲気、形、その様子)であると考えられる(呂, 2004)。さらに、「ころころ」という音象徴語の具体的な意味である「転がる」から抽象的な比喩表現への変換(メタファーリンク)に伴う焦点移動は音象徴語の多義性の一要因⁵とされている(国広, 1997)。筧(2003)と吉村(2004)は、音象徴語の比喩的特性を、擬音語から擬態語へ派生し、より抽象化された現象であると説明した。たとえば、「嵐で戸ががたがた」という戸が揺れる音を表す「がたがた」という音象徴語が「使い古した机ががたがた」という机の状態をあらわす意味へ拡張され、それが「失恋して身も心もがたがた」という心情を表す抽象的な意味となる(筧, 2003)。この、具体的な音の捉え方が聴覚から視覚へ、そして心理的・感情的な表現形態へと拡張されていくことは、共感覚的比喩表現であると考えられている(武田, 2001; 山梨, 2007)。しかし、その音韻に対する感じ方は、異なる文化・社会をバックグラウンドに持つ言語によって微妙な差異があり、また擬音語と擬態語は互いに連続的なものであるため、その境界が曖昧で分類しにくい。このことから、音象徴語が表し得るいくつかの意味が、派生的な感覚の形容(味覚, 嗅覚, 触覚 など)に用いられ、多義性を持つようになったと考えるのが妥当であると考えられる。このように、音象徴語の意味が派生していく段階を解明することは、多義音象徴語が生じる過程を明らかにする上で重要であると考えられる。ところで、音象徴語に特定の身体感覚的なイメージが付与されている要因としては、一般語彙とは異なる特定の感情回路を形成する脳内領域の活性化が影響している可能性が示唆される。この可能性を検証するために、音象徴語を刺激語として、Functional magnetic resonance imaging (fMRI)を用いて、脳内機構の探索を行った代表的な研究について次節で述べる。

3. 神経学的な観点からの音象徴語の検証

3.1. 感覚的経験として知覚される語彙

Ramachandran & Hubbard (2001)は、音象徴は聴覚と運動性言語中枢の間領域

⁵ たとえば、「ころころ」という転がる様子を表す運動感覚的な音象徴語の意味が「丸いもの」(たとえば、「ころころとした赤ちゃん」「ころころ太ってきた」など)という抽象の意味を持つようになり、そこからメタファーリンクを介して、「政策、思考などの進行や変化」(たとえば、「ころころと変わった政策」, 「ころころ考えが揺れるような人」など)など多義的な意味を持つようになる(呂, 2004)。

(cross-domain mapping)を活性化させるものではないかと推測した。また、音象徴語は外界の音声を模倣したものと考えられることから、音声やその他の知覚領域(たとえば、視覚、聴覚、触覚など)の活性化と関連があるのではないかと考えられてきた(Maurer & Mondloch, 2005)。そこで、Osaka, Osaka, Morishita, Kondo & Fukuyama (2004)は、痛みを表す音象徴語と無意味語のニューロンの情報表現(neural representation)について比較検討を行った。その結果、日本語母語話者が痛みの音象徴語を認知処理する過程において、痛みを感じる脳部位である、前帯状皮質(anterior cingulate cortex)の活性化がみられた。また、Hashimoto, Usui, Taria, Nose, Haji, & Kojima (2006)は、日本語母語話者が本物の犬の鳴き声と犬の鳴き声を表した音象徴語(「わんわん」)の両方の音声刺激を聞いた場合に、どの感覚に対応した領域が活性化されるかについて検討した。すると、犬の鳴き声を表した音象徴語を聞かせた場合に、両半球の上側頭溝領域(superior temporal sulcus)の活性化がみられた。左半球の上側頭溝領域は主に言語音を処理するのに対し、右半球の上側頭溝領域は外界の音(environmental sound)を処理するという機能上の違いがある(Thierry, Giraud, & Price, 2003)。つまり、音象徴語が両半球の上側頭溝領域の活性化に働きかけるものであることが確かめられたとすれば、それは言語音と外界音の両方を同時に処理しているということになる(Thierry et al., 2003)。よって、Hashimoto et al. (2006)は、日本語母語話者は、犬の鳴き声を表した音象徴語の言語音声処理を行うと同時に、その音象徴語を本物の犬の鳴き声としても音声認知していると結論付けた⁶。しかし、近年のニューロイメージング研究(neuroimaging studies)の知見から、一般語彙でもそれに関連する感覚領域を活性化させるということが示されている。たとえば、一次運動野と運動前野が「なめる=顔の行為(lick=face action)」や「掴む=手の行為(pick=hand action)」などの語彙と関連して活性化を示すことが確かめられている(Hauk, Johnsrude & Pulvemüller, 2004; Hauk & Pulvemüller, 2004)。これらの神経学的な観点(neurological perspective)から行われた先行研究によって、音象徴語とそれ以外の一般語彙のどちらにおいても、それらの語を聞いたときに、ヒトは感覚経験として反応を示すことが示唆された。しかし、音象徴語と一般語彙のどちらも感覚領域を活性化させることが確かめられていることから、音象徴語と一般語彙の認識の程度を比較する必要がある(Arata et al., 2010)。よって、音象徴語が一般語彙よりも音象徴としての特性が強い語であるかどうかについて比較検討した研究を次節で述べる。

⁶ この場合、犬の鳴き声を表した音象徴語は「言語音」であり、本物の犬の鳴き声は「外界の音」である。

3.2 音象徴語と間領域マッピング(cross domain mapping)との関連

Arata et al. (2010) は、動作を表す日本語の音象徴語と音象徴を伴わない日本語の動詞と副詞(以後、動詞/副詞)のニューロンの情報表現(neural representation)を比較し、音象徴語の方が動詞/副詞よりも知覚経験とより強く関連しているかどうかについて比較検討を行った。すると、一次運動野と運動前野領域(motor and pre-motor area)は、音象徴語、動詞/副詞のいずれの場合でも活性化がみられたが、音象徴語は動詞/副詞とヒトの動作場面映像を呈示したときに比べ、一次運動野、運動前野領域、聴覚領域において、より強い活性化を示していた。これらの領域(一次運動野、運動前野領域、聴覚領域)は、上側頭回領域(superior temporal gyrus)と上側頭溝領域(superior temporal sulcus)の両領域にまたがっており、Ramachandran & Hubbard (2001) が推測した音象徴語の「間領域マッピング(cross domain mapping) (本稿 3.1)と一致していた。このことから、日本語母語話者は音象徴語の音声知覚過程において、聴取した音声を感覚や感情体験と結び付けて認識していることが示唆された。このことから、Arata et al. (2010) は、日本語母語話者が音象徴語を「音と意味との有契性が他の一般語彙より強い語」(Hashimoto et al., 2006; Thierry et al., 2003)であると認識していると結論付けた。ところで、日本語母語話者が音象徴語の意味を感覚的に理解出来る要因は、生得的な言語能力であるという可能性も考えられる。したがって、その可能性を検証した先行研究として、日本語を母語とする幼児の音象徴語理解の特徴について検討した研究を次節で述べる。

3.3 日本語を母語とする幼児の音象徴語理解

大久保 (1967) と 福田・芋阪 (1999) は、それぞれ日本語を母語とする幼児の発話記録に基づく縦断研究と横断研究を通して、幼児が言語獲得をする際に、擬態語(擬情語)よりも擬音語を先に習得するという特徴があると述べた。また、Akita (2009) は、幼児の日本語発話データ(野地, 1973-1977)を用いて、音象徴語の出現回数を幼児の年齢ごとに分析したところ、幼児の音象徴語の獲得が類像性の高い音象徴語から類像性の低い音象徴語へと進む(擬音語→擬態語→擬情語)ことを示していた⁸。この結果は、「音象徴語において

⁷ 日本語母語話者を対象として、ヒトの動作場面映像と音象徴語もしくは動詞/副詞との当てはまりの良さを答えさせるという課題であった(Arata et al., 2010)。

⁸ Akita (2009) は、音象徴語を擬音語・擬態語・擬情語に分類し、それらを一般語彙と比較して「語彙的類像性の階層」と捉え、耳に聞こえてきた音を表現した擬音語は類像性が高く、抽象事象を描写的に表現した擬態語や擬情語は類像性が低いと述べている(擬音語 > 擬態語 > 擬情語 > 一般語彙)。

最も捉えやすい契機は聴覚である。そして、運動を通して世界に働きかけて行く際にも、音すなわち「聴覚」という契機を同時に利用することによって、それ自体としては往々にしてつかみどころのない運動感覚を音的な輪郭とともに捕らえることができるだろう」(滝浦, 1999)という指摘や宮崎・岡田・針生・今井(2010)が行った養育者と幼児の発話における音象徴語の出現頻度データと一致する結果となっていた。

幼児にとって、運動感覚を表す動作性語彙獲得が難しい理由としては、動作を表す語彙は物体を表す名詞に比べ変化に富んでおり、一連の動作のどの側面を表しているのかを視覚的に捉えにくいことがあげられる(Childers & Tomasello, 2006; Genter, 1982)。そこで、Imai, Kita, Nagumo, & Okada (2008)は、即時マッピング課題を用いて、音象徴語が動作映像とその動作を表す新奇語の対応付けを促進するかどうかを検討した。日本語を母語とする3歳児と成人の日本語母語話者を対象に、2種類の動作映像を並べて見せ、既存の音象徴語から音象徴性を失わないように、Hamano (1998)⁹の日本語の音韻体系を元に新たに作成された二音節反復型の音象徴語(以下 新奇音象徴語¹⁰)との対応付けをテストした(即時マッピング課題)。すると、3歳児グループは、日本人成人グループが有契性があると判断した動作映像と新奇音象徴語の組み合わせと同じ対応付けを行っていた。しかし、試行場面において新奇音象徴語が表す音象徴と不適合な動作映像をペアにして学ばせると¹¹、3歳児は実際の実験場面においても新奇音象徴語の音象徴的特徴が示す動作とは別の動作映像と新奇音象徴語を対応付けていた。このことから、音象徴語に含まれる音象徴的特徴が動作性語彙理解の橋渡しをしている可能性は高いが(Imai, Haryu & Okada, 2005; Imai, Haryu, Okada, Hirsh-Pasek, & Golinkoff, 2008; Kersten & Smith, 2002)、生得的に日本語母語話者が音象徴語の音象徴的特徴の表す意味について理解しているというわけではなく、それらは学習によって習得されるものであるということが示唆された。しかし、「音象徴語が言語の恣意性を覆す例であり、その有契性が過小評価されてきた」(田守・スコウラップ, 1999)と指摘されて以来、音象徴語には非日本語母語話者がその意味を学習

⁹ Hamano (1998) は、日本語の音象徴語表現について、特定音韻の組合せが特有の音象徴的意味を喚起するとし、日本語の音象徴語の音象徴的特徴について体系化した。

¹⁰ たとえば、「ばとばと」-/b/: 重く力強い動き /n/: 地面に当たる音、「のすのす」-/n/: 遅い動き /s/: 摩擦を表す、「ちよかちよか」-/ch/: 軽く、抑圧された、頼りない動き /k/: 外に向かう動きを表す など(Imai et al., 2008)。

¹¹ たとえば、「ねえ、ちよかちよかしてる!」と言って、本来なら「頼りない動き」を表す動作映像とペアになるはずの新奇音象徴語を、「ヒトがゆっくり大きな歩幅で歩く」動作映像とペアにして調査者が3歳児に学ばせる(Imai et al., 2008)。

することなしに理解出来る言語普遍的な側面があるのではないかということが示唆されてきた。そこで、次節では、非日本語母語話者の音象徴語理解について検討された研究を、三つに分けて挙げる。

4. 非日本語母語話者の音象徴語理解

4.1 英語母語話者と日本語母語話者の間にみられる音象徴語の印象評定の仕方の相違

日本の日常生活で頻繁に使われる音象徴語の意味を理解できる留学生は殆どいないとあって良いのではないだろうか。実際、音象徴語は日本語学習者が習得困難な事項の3番目にあげられている(玉村, 1989)。その理由としては、日本語母語話者であれば、音象徴語が表わす意味やニュアンスなどを直観的に理解できるが、非日本語母語話者にとっては、語感などを頼りに音象徴語の意味を理解するのは難しいという事が指摘されている(三上, 2007)。しかし、日本語の知識を持たない非日本語母語話者でも、日本語の音象徴語の表す意味などを理解できる側面があるとすれば、それは音象徴語の理解や習得を容易にするものであると考えられてきた(王, 2011 など)。

Iwasaki et al. (2007) は、日本語母語話者と英語母語話者(日本語の学習経験はない)に対して「歩く様子や音」と「笑う様子や音」の音象徴語の印象評定を行い、その印象の感じ方の相違点について SD 法を用いて検討した。すると、「笑う様子や音」をあらわす音象徴語の「口を大きく開けて一口を閉じて」、「大きい声—小さい声」、「継続—瞬時」、「響く声—響かない声」の次元に関しては、日本語母語話者と英語母語話者共に高い相関が得られた。一方で、「きれいな声—きたない声」、「快い声—不快な声」に関する次元では、日本語母語話者と英語母語話者間には負の相関がみられ、両母語話者はそれぞれ全く逆の評定の仕方¹²をしていた。また、両母語話者共に「歩く様子や音」に関する音象徴語では、無声音に比べ有声音の方が「大きい人」だと評定する傾向が見られたが、「優雅—ぎこちない」と「男性的—女性的」の次元では日本語母語話者と英語母語話者の評定の仕方はそれぞれの母語話者間でのみ相関が見られた。さらに、Imai et al. (2008) は、本稿(3.3)で3歳児に対して行った実験方法を用いて、成人の日本語母語話者と英語母語話者に対して即時マッピング課題を行ったところ、日本語母語話者は新奇音象徴語とその語が担っている音

¹² たとえば、日本語母語話者が「大変上品」だと感じた音象徴語は、英語母語話者にとっては「大変下品」であった(Iwasaki et al. 2007)。

象徴的特徴を表す動作映像とを確実に対応付けられることが確かめられた。また、英語母語話者の結果は 100%ではないが、チャンスレベルより高い確率で対応づけ反応を示していた。つまり、日本語の知識を持たない言語話者であっても、日本語母語話者の間で共有されている日本語の母音と子音があらず語音の感覚をある程度理解できるということが示唆された。また、日本語母語話者であれば音象徴語が慣習的な音象徴語でない場合でも、その音象徴語の言語音が表す音象徴的意味と指示対象とを対応付けられることが明らかになった。このことから、Iwasaki et al. (2007) と Imai et al. (2008) は、確かに音象徴語の持つ音象徴的要素は、ある程度ヒトの言語・文化的背景に関わりなく、その語が表す特定の意味側面を理解できるような言語普遍的側面を備えているが、厳密には各言語に特有なものであると結論付けた。しかし、非日本語母語話者が音象徴語の意味を学習することなしに理解出来るという音象徴語の言語普遍的側面については、いくつかの仮説は提出されていたが、仮説にとどまっている状態であった。その代表的な仮説の1つである音象徴語の音韻が持つルール・ベースの意味対比について検討した研究を次節で挙げる。

4.2 日本語学習者の音象徴語理解

日本語のレベルが超級の学習者にとっても、日本語の音象徴語は「感覚的で規則性がないため、助詞や敬語の使い分けといった文法的な問題以上に難しく」、ゆえに音象徴語は「つかみどころのないもの」とであると述べられている（張, 1989）。その指摘に対し、彭 (2007) は、有声音と無声音の音象徴語をセットで教えることが、日本語学習者に教える際に効果的であると指摘した。

針生・趙 (2007) は、大きい対象を有声音、小さい対象を無声音であらわすという、音象徴語の有声音・無声音対比のルール(田守, 2002 など)は、言語的な背景に縛られない共通な感覚に根ざしている可能性が高いと考え、音象徴語の有声音・無声音によるルール・ベースの意味対比がどれだけ言語普遍的なものであるかどうかについて、日本語母語話者と中国語母語話者(日本語学習経験はない)を対象に二音節反復型の音象徴語と大小を表すイラスト¹³を用いて検討を行った。その結果、日本語学習者は、有声音を大きな対象、無声音を小さな対象へとほぼ 100%の確率で対応付けたが、中国語母語話者はチャンスレベルにしかならなかった。さらに、「どんどん」を「とんとん」よりも小さな音量で呈示するとい

¹³ たとえば、「大きな太鼓」と「小さな太鼓」(針生・趙, 2007)。

うように、刺激語の音量を変えて実験を行うと、中国語母語話者は、有声音・無声音の音象徴語のどちらの刺激語対しても、大きな音量で呈示された方の音象徴語を小さな音量で呈示された音象徴語よりも大きな対象と対応つけて答えていた。このことから、中国語母語話者は音象徴語の有声音・無声音による意味の違いに基づいて、その音象徴語が表す対象物の大きさを区別していたわけではなかったことが示唆された。これは、中国人日本語学習者は有気と無気の違いは区別できるが、日本語の有声音と無声音の違いは区別ができない（張，1989）という指摘を反映した結果であるとも考えられる。また、針生・趙（2007）の結果は、中国語母語話者の間には「けらけら」と「げらげら」に対する「上品一下品」の印象評定に有意な差が見られなかったという、栄（2008）が行った研究結果とも軌を一にする結果となっていた。こうしたことから、日本語母語話者と同じようなルール・ベースでの音象徴語の理解は、非日本語母語話者の間では共有されているものではないことが明らかにされた。このように、これまでの先行研究では、「音韻に対する印象の相違点」や「有声音と無声音対比の意味の違い」という様な、音象徴語の持つ限られた一側面に焦点を当てて検討が行われてきたため、音象徴語が語彙として意識されてこなかったことが指摘された（飯田・玉岡・初，2012）。よって、次節では、音象徴語の意味的側面に焦点を当てて検討された研究を挙げる。

4.3 日本語学習者の語彙としての音象徴語理解

語彙として認められる日本語の音象徴語は様態の副詞として機能する場合が多い（羽佐田，2005；Kakehi，1983；李，1998，2000；田守，2003；田守・スコウラップ，1999；Toratani，2007）。これは、他の言語に比べ、日本語には異なる物事の状態や様子を表わす動詞が少ないため、副詞として機能する多様な音象徴語によって動詞を修飾することで、その意味を補っていると言える（Hirose，1981；Kakehi，1983；筧・田守，2003；Kimizuka，1967；佐藤，1977；Toratani，2006，2007）。たとえば、英語で「笑う様子」を表わす動詞はそれぞれ *grin*，*smirk*，*giggle*，*cackle*，and *chuckle* など多様にあるが、日本語では「笑う」の一語だけである。そのため、英語の *giggle* や *smirk* と同じ意味を日本語で表現したい場合は「くすくす笑う」や「にやにや笑う」のように「笑う」という動詞の前に適切な音象徴語が必要とされる（角岡，2003）。つまり、音象徴語は音象徴語それ自体では、英語の動詞が一語で表わせるような具体的な意味を表わすことは出来ず、必ず動詞を伴う必要があるといえる（Shibatani，1990）。さらに、様態の副詞として機能する音象徴語が普通の副詞と異なるという点がある。それは、

「しくしく」だったら「泣く」、「ぴよんぴよん」だったら「跳ぶ」のように、共起する動詞が決まっており、様態副詞として機能する音象徴語は個別性が高いという点である（秋元, 2007）。

そこで、飯田ほか（2012）は、中国人日本語学習者（中国国内）を対象に、二音節反復型で副詞として機能する音象徴語の意味理解課題と日本語の読解テストを行なった。質問形式は、テキストを与えずに、30語の音象徴語それぞれに4つの選択肢があり、その中から各音象徴語と一緒に使える適切な1つの動詞を選ぶというものであった。その結果、読解能力が高い程、音象徴語の意味理解も高くなることが確かめられた。この結果から、音象徴語はその意味を理解することなく感覚的に理解できるという可能性は低く、むしろ音象徴語は意識的に語彙として習得していく必要があることが示唆された。

5. おわりに

本稿では、音象徴語の言語普遍性と言語個別性について検討されてきた研究を概観することで、音象徴語は言語と独立した共通の認識次元を持つ様な普遍的なものではなく、同一の音韻であっても異なる母語話者間ではその音韻について感じる印象には違いがあり、音象徴語の言語普遍的側面は同一の母語話者間でのみ共有される限定的なものであることを示した。したがって、日本語学習者が感覚的に音象徴語の意味を理解することは極めて難しいことから、日本語教育において音象徴語は「音象徴の諸側面の利用法や母語の異なる学習者に対して音象徴のどの部分を重点的に教えるか」（王, 2011 など）という音象徴語の限られた側面に焦点を当てるのではなく、特定言語の特定語彙として捉え研究を進めていくことが重要であると言えよう。

[参考文献]

- Akita, K. (2009). *A grammar of sound-symbolic words in Japanese: Theoretical approaches to iconic and lexical properties of mimetics*. Doctoral dissertation, Kobe University.
- Arata, M., Imai, M., Okuda, J., Okada, H. & Matsuda, T. (2010). *Gesture in language: How sound symbolic words are processed in the brain*. (pp. 1374-1379). In the Proceedings of the 32nd Annual meeting of the Cognitive Science Society.
- Atzet, J., & Gerard, H.B. (1965). A study of phonetic symbolism among native Navajo speakers.

- Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 524-528.
- Bartens, A. (2000). *Ideophones and Sound Symbolism in Atlantic Creoles*. Helsinki: Finnish Academy of Sciences and Letters.
- Brackbill, Y., & Little, K. (1957). Factors determining the guessing of meanings of foreign words. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 54, 312-318.
- Brown, R. W., Black, A.H., & Horowitz, A. E. (1955). Phonetic symbolism in natural language. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 50, 388-393.
- Brown, R., & Nutall, R. (1959). Methods in phonetic symbolism experiments. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 59, 441-445.
- Childers, J., & Tomasello, M. (2006). Are nouns easier to learn than verbs? Three experimental studies. (pp. 311-335). In K. Hirsh-Pasek & R. Golinkoff (Eds.), *Action meets word: How children learn verbs*. New York; Oxford University Press.
- de Saussure, F. (1983). *Course in general linguistics*. La Salle, IL: Open Court (Original work published in 1916. Translated by Harris, R.).
- Gentner, D. (1982). Why nouns are learned before verbs: Linguistic relativity versus natural partitioning. In S.A. Kuczaj (Eds.). *Language Development: Language, thought, and culture* (Vol. 2, pp. 301-334). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Hamano, S. (1998). *The Sound-Symbolic System of Japanese*. CSLI Publications.
- Hashimoto, T., Usui, N., Taira, M., Nose, I., Haji, T., & Kojima, S. (2006). The neural mechanism associated with the processing of onomatopoeic sounds. *Neuroimage*, 31, 1762-1770.
- Hauk, O., Johnsrude, I., & Pulvermüller F. (2004). Somatotopic representation of action words in human motor and premotor cortex. *Neuron*, 41, 301-307.
- Hauk, O., & Pulvermüller, F. (2004). Neurophysiological distinction of action words in the front-central cortex. *Human Brain Mapping*, 21, 191-201.
- Hirose, M. (1981). *Japanese and English contrastive lexicology: The role of Japanese "mimetic adverbs"*. Doctoral dissertation, University of California, Berkeley.
- Huang, Y.-H., Pratoomraj, S., & Johnson, R.C. (1969). Universal magnitude symbolism. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 8, 155-156.
- Imai, M., Haryu, E., & Okada, H. (2005). Mapping novel nouns and verbs onto dynamic action

- events: Are verb meanings easier to learn than noun meanings for Japanese children? *Child Development*, 76, 340-355.
- Imai, M., Haryu, E., Okada, H., Hirsh-Pasek, K., & Golinkoff, R. (2008). Novel noun and verb learning in Chinese-, English-, and Japanese speaking children. *Child Development*, 79, 979-1000.
- Imai, M., Kita, S., Nagumo, M., Okada, H. (2008). Sound symbolism facilitates early verb learning. *Cognition*, 109, 54-65
- Iwasaki, N., Vinson, D.P., Vigliocco, G. (2007). What do English speakers know about gera-gera and yota-yota? *Japanese-Language Education around the Globe*, 17, 53-78.
- Takehi, H. (1983). Onomatopoeic Expressions in Japanese and English. *Proceedings of the XIHth International Congress of Linguists*, 913-918.
- Kersten, A.W., & Smith, L. (2002). Attention to novel objects during verb learning. *Child Development*, 73, 93-109.
- Kimizuka, S. (1967). A contrastive study of the Japanese structural device ‘Onomatopoeia + verb’ and certain English verbs. *The journal – Newsletter of the association of teachers of Japanese*, 4, 12-16.
- Maltzman, I., Morrisett, L., & Brooks, L. O. (1956). An investigation of phonetic symbolism. *Journal of Abnormal and Social psychology*, 2, 249-251.
- Mauer, D., & Mondloch, C. J. (2005). *Neonatal synesthesia: A re-evaluation*. In Robertson, L. C., & Sagiv, N. (Eds.), Oxford: Oxford University Press.
- Miron, M.S. (1961). A cross-linguistic investigation of phonetic symbolism. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 62, 623-630.
- Newman, S.S. (1933). Further experiments in phonetic symbolism. *American journal of psychology*, 45, 53-75.
- Osaka, N., Osaka, M., Morishita, M., Kondo, H., & Fukuyama, H. (2004). A word expressing affective pain activates the anterior cingulate cortex in the human brain: an fMRI study, *Behavior Brain Research*, 153, 123-127.
- Osgood, C., Suci, G., & Tannenbaum, P. (1957). *The measurement of meaning*. Urbana : University of Illinois Press.
- Ramachandran, V. S., & Hubbard, E. M. (2001). Synaesthesia-a window into perception,

- thought, and language. *Journal of Consciousness Studies*, 8, 3-34.
- Rumelhart, D.E., & Ortony, A. (1977). The representation of knowledge in memory'. (pp. 99-136). In: Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Sapir, E. (1929). A study in phonetic symbolism. *Journal of Experimental Psychology*, 12, 225-239.
- Shibatani, M. (1990). *The languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Taylor, I.K., & Taylor, M.M. (1962). Phonetic Symbolism in four unrelated languages. *Canadian Journal of Psychology*, 16, 344-356.
- Thierry, G, Giraud, A.L., & Price, C. (2003). Hemispheric dissociation in access to the human semantic system. *Neuron*, 38, 499-506.
- Toratani, K. (2006) *On the optionality of to-marking on reduplicated mimetics in Japanese*. (pp.415-422). In Vance, T.J., Jones, K (Eds). *Japanese/Korean Linguistics 14*. Stanford: CSLI.
- Toratani, K. (2007) "An RGG analysis of manner adverbial mimetics." *Language and Linguistics*, 8, 311-342.
- Tsuru, S., & Fries, H.S. (1933). A problem in meaning. *Journal of general psychology*, 8, 281-284.
- Williams, J.M. (1976). Synaesthetic adjectives. *Language*, 52, 461-478.
- 秋元美晴 (2007). 「日本語教育におけるオノマトペの位置づけ」『日本語学』 26, 24-34.
- 浅野鶴子 (1978). 『擬音語・擬態語辞典』 角川書店出版
- 天沼寧 (1974). 『擬音語・擬態語辞典』 東京堂出版
- 雨宮俊彦・水谷聡秀 (2006). 「日本語オノマトペの基本感情次元と日本語音感素の基本レベルについて」『関西大学社会学部紀要』 37, 139-166.
- 飯田香織・玉岡賀津雄・初相娟 (2012). 「中国人日本語学習者の音象徴語の理解」『日中言語研究と日本語教育』 5, 46-54.
- 栄珊 (2008). 「中国語母語話者による日本語オノマトペの理解」神戸大学修士論文
- 王瑩 (2011). 「異なる日本語学習者による日本語のオノマトペに対する感覚評価日本語教育研究」『日本語教育研究』 57, 65-82.
- 大久保愛 (1967). 『幼児語の発達』 東京堂
- 芋阪直行 (1999). 『感性のこぼれを研究する—擬音語・擬態語に読む心のありか』 新曜社.

- 笈寿雄 (2003). 「文学作品に見られるオノマトペ表現の日英対照」 田守育啓・笈寿雄(編)『オノマトピア:擬音・擬態語の楽園』 pp.127-144, 勁草書房
- 笈寿雄・田守育啓 (2003). 『オノマトピア:擬音・擬態語の楽園』 勁草書房
- 角岡賢一 (2003). 「日本語の疑似オノマトペ」 田守育啓・笈寿雄(編)『オノマトピア:擬音・擬態語の楽園』 pp.145-212, 勁草書房
- 国広哲弥 (1997). 『理想の国語辞典』 大修館書店
- 佐藤喜代治(1977). 『国語学研究事典』 明治書院
- 須部宗生・梅本孝 (2004). 「普通語彙の音象徴とオノマトペ性」『環境と経営』 10, 141-155.
- 瀬戸口律子 (1985). 「中国語の“象声詞” 日本語の擬音語との比較を中心に」『大東文化大学紀要』 23, 341-357.
- 武田みゆき (2001). 「中国語にみる共感覚表現についての一考察」『ことばの科学』 14, 107-118.
- 滝浦真人 (1999). 「子どもはいかにして世界を表現するか」『共立女子大研究叢書』 17, 66-162.
- 玉岡賀津雄・木山幸子・宮岡弥生 (2011). 「新聞と小説のコーパスにおけるオノマトペと動詞の共起パターン」『言語研究』 139, 57-84.
- 玉村文郎 (1989). 「日本語の音象徴語の特徴とその教育」『日本語教育』 68, 1-12.
- 田守育啓 (2002). 『オノマトペ:擬音語・擬態語をたのしむ』 岩波書店
- 田守育啓 (2003). 「日本語オノマトペの統語範疇」笈寿雄(編)『オノマトピア:擬音・擬態語の楽園』 勁草書房
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ (1999). 『オノマトペー形態と意味ー』 くろしお出版
- 張麗群 (1989). 「中国人学習者から見た日本語の擬音語と擬態語」『日本語教育』 68, 128-130.
- 築島謙三 (1941a). 「邦語における擬声語・擬態語の象徴性について」『心理学研究』16, 176-180.
- 築島謙三 (1941b). 「語音象徴に関する一考察」『心理学研究』 16, 232-253.
- 野地潤家 (1973-1977). 『幼児期の言語生活の実態』 文化評論出版
- 野間秀樹 (1998). 「最もオノマトペが豊富な言語」『言語』 27, 30-34.
- 野間秀樹 (2001). 「オノマトペと音象徴」『言語』 30, 12-18.

- 羽佐田理恵 (2005). 「福祉の視点から見た感情を表す音象徴語:その分析過程から導かれた問題点への取り組み」武内道子(編)『副詞的表現をめぐって』 pp.175-211, ひつじ書房
- 針生悦子・趙麗華 (2007). 「日本語における有声音/無声音対比の擬音語と大小の対応づけ」日中大学生による判断の比較『日本認知科学会大会発表論文集』 23, 66-67.
- 飛田良文・浅田秀子 (2002). 『現代擬音語擬態語用法辞典』 東京堂出版刊
- 福田香苗・芋阪直行 (1999). 「幼児の発話に見える擬音語・擬態語」芋阪直行(編)『感性のことばを研究する-擬音語・擬態語に読む心のありか』 新曜社.
- 彭飛 (2007). 「ノンネイティブから見た日本語のオノマトペの特徴」『日本語学』 26, 48-56.
- 三上京子 (2007). 「日本語教材とオノマトペ」『日本語学』 26, 36-46.
- 宮崎美智子・岡田浩之・針生悦子・今井むつみ (2010). 「対成人・対幼児発話におけるオノマトペ表出の違い: 母子絵本読み調査における検討から(発達と知識獲得)」『電子情報通信学会技術研究報告. TL, 思考と言語』 110, 27-31.
- 宮地裕 (1978). 「擬音語・擬態語の形態論小考」『国語学』 115.
- 村上宣寛 (1980). 「音象徴仮説の検討」『教育心理学研究』 28, 184-191.
- 森本博 (1979). 「Semantic Differential 法による onomatopoeia の分析」『神戸山手女子短期大学紀要』 22, 41-57.
- 矢口幸康 (2011). 「オノマトペをもちいた共感覚的表現の意味理解構造」『認知心理学研究』 8, 119-129.
- 山梨正明 (2007). 『比喩と理解』 東京大学出版会
- 吉村公宏 (2004). 『はじめての認知言語学』 研究社
- 李殷娥 (1998). 「日本語と韓国語のオノマトペに関して」『国際開発研究フォーラム』 10, 73-88.
- 李殷娥 (2000). 「日本語と韓国語のオノマトペに関する対照研究」名古屋大学博士論文
- 呂佳蓉 (2004). 「比喩としてのオノマトペー「ころころ」と「圓滾滾」」『日本認知言語学会論集』 4, 480-483.